# 拙稿　教職あらかると　**教員研修はどのように進めるべきか**

## に寄せられた各氏のご意見・ご感想

A 氏

（道徳科の出現以来、）従来の授業を分かっていない人から、それを批判されたり、型を押しつけているというような質問や意見にさらされたりして、疲れることが多いですが、その疲れの中から出た結論は、「従来の型でなくてはいけない」と言う方と、「従来の型は変え なくてはいけない」と言う方は、「形だけでものを言う」という意味で同類と言うことです。

積み重ねてきた研究の成果を否定する方々は、そのことを本当に分かるべきだと思います。

そもそも、「従来の型でなくてはいけない」なんて誰 も言っていないわけで、「研究を積み重ねてこそある基本形には深い意味がある」ということを言っているわけです。

そこを踏まえた上で、今後の指導方法の開発に道 徳教育界一丸となって進んでいきたいものです。

とは言え、内外共に道徳教育界は重症だ…と思う日々です。

とにかく、自分にできることを精一杯やっていくだけです。

B 氏

本当に学びたい人は、自分を勘定に入れずに真摯に学んでいます。そして、そういう人は目の前の子どもとどう向かっていくかだけしか考えていません。思い着きの突飛な方法論をぶら下げて、「こういう授業はどうだ！」と話している若い先生の授業の話は「自分の説を認めてもらいたい」という気持ちばかりがあって子ど もがいないのです。私は子どもに真に認められる授業がしたいし、それを目指したいのです。

そう思えるのは、かつての教え子たちのおかげです。「情」をかけた分だけ「情」で返し、「情」をかけなかったらそっぽを向く単純な子どもたちでした。私はまだ駆け出しの未熟者で、教育のことは何も分からず、ただただ必死にやっただけの初めての高学年の子たちが、今でも一番慕ってくれています。その時の先輩教師の「子どもの言うことをしっかり聴くことを忘れないでやれ。」という教えが今でも私の基礎基本になっています。子どもを教育するのに何でもいいなんてことはないですよ。私はこの教えがあったからこそ、高学年を担任するのが好きになったのだと言えます。

その著名人に近い若い子が都小道研や全小道研の先輩の先生方に指導されて、筆者に泣き言を言ったのかもしれません。そんなこともあって、筆者は都小道研や全小道研の先生方の指導を否定するようなあんな文章を堂々と出して、救世主のようなお気持ちになっているのかもしれません。

後藤先生は私たちに、指導法というより「道徳とは何か」ということを常に教えてくださっています。芽を摘ん でいるとか摘まれたとか、私は思ったことがありません。だから、本校の先生方は皆のびのびと取り組むことができたのではないでしょうか。T 先生は先生から最初「『ケイくんのたくはいびん』の資料は止めた方がいい」と言われたけれど、挑み続けて、あそこまでいい教材 に仕上げて、よい授業にして、先生が「この資料を他 の学校にも紹介したい」とおっしゃるまでにしたじゃありませんか…。要するに、指導を受ける人が指導者からダメだと言われたら、「これでどうだ！」と挑んでいく姿勢が大切だと思います。基礎基本を噛みしめ、消化しながら挑戦していくことこそ、深めること、広げることになるのだと思います。基礎基本を習得する中から自然と出てくる「破」が個性なのだと思います。

C 氏

基礎練習を積む中で自然と出てくる「破」が個性なのだと思います。

「人が心から向上しようと思うのは、指導者の温かい人間性に触れ、それに感化され、啓発された時である」という先生の言葉が、特に心に響きました。学生の時に恩師から、「人はそう簡単には変われません。愛情 なく叱られて変わる人はいません。変われるときは愛 情を感じ、感動したときです。」と言われたことを思い出しました。

管理職の発言や行動は良くも悪くも影響力が大きいので、どんなに忙しいときでも温かさを大切にして いこうと

いうエネルギーがわきました。

D 氏

弁証法的な考え方をすれば、論理（教員研修）は、正（基本）・反（応用）・合（まとめ）で発展していきます。この繰り返しで教員研修も流れていくと思います。

卑近な例ですが、ゴルフ界の松山プロと石川プロの比較がよく言われています。石川は高校時代から運とツキにも恵まれて天才と称され、大いに活躍をされました。高校を卒業すると同時にプロに転向し、外国にも出かけました。ゴルフ界のスーパースター、タイガー・ウッズから、「こちらのゴルフ大学に入学し、ゴルフを基本から学んだり、基礎体力をつけたりしてから大活躍したらどうか」という助言をいただいたにもかかわらず、彼は自分の道を歩んでいきました。その結果が現状です。予選を通過することがやっとという状況です。

一方、同年齢の松山は、高校を卒業すると東北福祉大学に入学し、ゴルフを基礎から学び、体力を向上させる努力もしてきました。現在、日本人で外国の試合で優勝をねらえるのは彼一人といった状況です。（優勝経験もあります。）基礎の大事さを教えてくれていると思います。

荒唐無稽な授業をよしとすることなどあり得ません。学ぶ子供にとっては毎日の一時間は二度と帰ってこない時間です。大切にしましょう。

E 氏

研修会に行って、驚くべき指導案とその授業を目のたりにすることがあります。

今の若手教員は「誰も教えず、のびのび育って、自信をもって」のスタイルを身に付けてしまったのでしょうか。

その学校の管理職・研究推進委員長・道徳主任・学年主任は一体何をしていたのでしょう。それを参観 して、「真似しよう、何でもいいんだ」と受け入れてしまう若手教員もいます。ゲーム感覚でグループ活動をして、方法論で解決しようとしたり、その場しのぎの結果 オーライで結論付けしたり・・・。

基礎基本を身に付けずして個性の発揮、普遍性のある工夫・開発、専門性の向上などありえません。被害を受けるのは子どもたちです。

これからも、子どもたちの心の成長を目指して、現職と一緒に基礎基本を踏まえて、智恵を絞り合い、よりよい道徳授業を追究していきたいと思います。

F 氏

「絶対にそうなのですか？」「そうしなくてはならない のですか？」

このような質問を授業研修会でよく受けます。指導論や学習指導案の作成手順、指導上の留意事項な どが具体的で明確であればあるほど、特に若手からの質問が多いです…。

私は言います。「道徳授業の特質と役割は何かを常に確かめながら、効果的な道徳授業を目指して、私たちは主体性をもって実践的に授業づくりを進めてきました。その集積がこの研究収録です。」「したがって、このやり方でないと１００％ダメとか、やっちゃだめとか は判断しかねます。」「私が伝えた道徳授業の基本を授業者が思いをもって、まずやってみて、その結果から判断してほしいのです。」と。

本校も少しずつメンバーは代わってきていますが、2年前から始めた授業研究は試行錯誤しながら今に至り、そこからつかんだ授業づくりの考え方やその基本を共有しています。先生方は「指導案検討会で教材分析表を基に、どの場面を問うべきか皆でワイワイ議論するのが一番おもしろいよね。」と言っています。現在もＩ氏、Ｓ氏は研推メンバーとして健在です。「先に指導案ありき」ではなく、まず教材分析と教師の思いがいかに大事であるかを実感しています。

G 氏

私も時々、いわゆる道徳の専門家が集う研究会で 講師として道徳を語っております。

中学校に行くことが多いのですが、時々、心配な言葉が耳に入ってまいります。

例えば、

- 「その発問は教材の読み取りだから不適切。道徳科の時間では教材の読み取りの発問はダメだ…」

（おそらく勘違いだと思う。読み取りのみに終始する道徳は・・という指摘だったはずが、読み取りは全ていけないと言ういわゆる専門家。「行間を読む」ということが理解できていないのではないか、何のための教材なのか。登場人物の心情に寄り添い、道徳的諸価値理解の入り口とし、多角的・多面的に

考え、自らの生き方、人間としての生き方について考えを深めるのが道徳科の時間ではないのか・・・)

・「小学校の道徳はカタチだけにこだわり、一般化があるから良くない…」

(自称専門家が言った言葉ですが、道徳科授業のカタチすら理解してないし、小学校道徳を理解していない、まして一般化という意味も理解していない。中学校における展開の後段は、道徳的諸価値にかかわり、自らの生き方を振り返りつつ人間としての生き方について考えを深める、主題に迫る段階ではないのか・・)

いわゆる若い自称専門家の芽を摘まないように配慮して・・・・というのは、なかなか難しいですね。

H 氏

アランの『児童教育論』(松島鈞訳 明治図書)の中に次の記述があります。

「創造するには方法は一つしかない。模倣することだ。良く考えるには方法は一つしかない。古くからの試練を経たなんらかの考えを継承することだ。(同書 p185)」

ここに示したアランの考えは、「本質」であると私は考えています。不易と流行に例えるなら不易にあたる部分です。先生が常々仰っている「教員研修は『守破離』の道理をもって進めるべきである」もまた「本質」となる考えです。

世の「風潮」は変化します。しかし、そのような中でも変わることのない「本質」をわきまえておく。それが重要であると思うのです。「改革!改革!」と叫ばれるような時代であるなら、なおさらです。

私たちは、「本質」をわきまえた上で、指導、助言に臨むことが重要であると考えます。であれば、「厳しい」と思われるような助言は「排他的」ではなく、「的確な」助言となります。また、「寛容な」助言は「迎合」ではなく、「先までを見据えた」助言となります。

なお、「排他的」な態度、「不寛容」な態度自体は、研究的な態度とは相容れないものであり、慎むべきであると考えます。 先生が最後に仰った「人が心から『向上しよう』と思うのは、指導者の温かい人間性に触れ、それに感化、啓発された時である。このシンプルな道理を常に自覚・自戒しながら教員研修や人材育成、人間教育に当たりたいものである」というお考えもまた「本質」であると思います。私は、教員としての年数を重ねる度に、このことをより深く身に染みるようになっております。

I 氏

今、バティックという染色による絵を習っています。チャンティンという道具を使ってロウを引き、その間に色を塗っていきます。チャンティンの引き方が悪いと色が混じってしまい、綺麗な絵がかけません。色の塗り方もただ好き勝手に塗ると、出来る事は出来ますが、とても人に見せらるものにはなりません。自己満足なだけです。やはり、はじめはコツコツ先生の指導を真似て描いていきます。

あるとき、「あれ? こうやればもっと早く、綺麗にできるんじゃない?」という事にぶつかりました。でも、とても先生には言えませんでした。何回かやった頃、たまたまそのことが口から滑って出てしまいました。

もちろん先生はごきげん悪く、「では、自分でやりなさい!」と突き放されてしまいました。ところがしばらくたって、先生が他の人に指導なさっているのを聞いていたら、何と「あっ、それ私のやり方…!」でした。

でも、こんな風に疑問を抱けるようになるまでは、ずっとずっと基本の練習を繰り返していました。初めからなんて絶対できないし、やってもデタラメに過ぎません。

私の道徳で言えば、「銀の燭台」の大失敗の後がそれでした。学習指導過程について、ずっとずっと勉強してきて、あるとき、試して見たいことが出てきたので研究授業でやってみました。

しかし当時は、そのやり方は「道徳にあらず!」でしたので講師で来られた某校長先生から真っ向から否定されました。

が、その後、その校長先生の学校の研究発表会に行ったら、何と私が否定されたやり方が研究の目玉になっているではありませんか!

基礎の徹底的な勉強、その上に立ってこその変化と進歩。昔から言われた先人は本当にすごいと思いましたし、その見極めの難しさを改めて感じました。

J 氏

このところ、これまで教師が担当すべき範疇にあった指導方法の工夫が学習指導要領に書き込まれるなどして

から、「目的論なしの方法論」に堕した道徳科の指導が進められています。

これまで、中学校は道徳の時間を他の活動に振り替え、適切に実施してこなかった状況が多くありました。今度の学習指導要領の改訂で「特別の教科としての道徳」になって、道徳科授業を他の活動へ振り替えることが出来なくなり、確実に道徳の時間は確保されることとなりましたが、これまで道徳授業に真面目に取り組んで来なかった教員にとっては、方法論に流れた指導になりがちで、真に子ども達一人一人の生き方の自覚に結び付く指導にならないという問題点が指摘されるわけです。

かつて、文科省の教科調査官が代わる度に「独自の私見」が出されてきた経緯が見られました。そもそも、私たち学校現場の教員にとってのバイブルは、学習指導要領とその解説書にあったはずです。教科調査官の役割は学習指導要領の趣旨の定着を学校現場に図ることで、方便のつもりであったとは思われますが、「私見」を披露して、現場を混乱させることではないと思います。

子ども達が道徳授業をどう受け止め、自己の人格形成にどう活かしていくのか、この点こそ授業をどう組んでいくのかの指針となる訳で、今後、私たちが授業研究を更に深め、実効ある成果を残していくことが極めて大切だと思われます。よい成果を積み重ねていくことで、課題となる状況は自然に解消してくると思います。

K 氏

私は算数教育を 30 年以上にわたり続けております。先生のおっしゃることを算数教育の立場からも同様に感じておりました。

今回の改定で、「主体的・対話的な深い学び」という指導方法まで文科省が示したことにより、基礎・基本が身についていない教師による「活動あって学びなし」「さまよう授業」がますます増えてきました。

そんな中、指導・助言後に、同じように誤解される講師の方々の姿を見るようになりました。意図した助言や指導も、受け止める側に準備がないと大変難し いようです。

L 氏

道徳には正解や型はないと思っていましたが、先人たちの培ったものがあり、文化として今に至っているのだと分かりました。著名な方が書いた文章については、その方が道徳教育に長けている人でなく、一般論として書かれたのであれば、まあ分かると思いました。そ の方の①から③の問題点の指摘は短文過ぎて読み 取ることができません。最後の「自戒を含めて」の内容は道徳素人にもよく納得できる内容でした。

M 氏

守破離については自校の職員にも生徒にも当てはまります。型を知らない生徒と教えない職員。一度、面接のときに管理職に訴えたのですが、「高校は義務 教育とは違う」とあっさり却下されたことがありました。やっぱりどこでも型は大事だと思います。

著名な方の説にはイラッとしました。若手はしっかり 冒険しているし、良いところは認めているし、方向がブレブレの研究会なんて入りたくないと思ってしまいまし た。

最後はスッキリと、「今日の登校指導では生徒たちを笑顔で迎えよう」という気持ちになりました。

N 氏

恥ずかしながら、私は道徳の授業は苦手です。悪い見本の通り、道徳授業でエンカウンターやソーシャルスキルトレーニングをやってみたり、行事と関わらせて みたりして…、読み物資料の道徳は敬遠してしまいがちでした。自戒の念も込めて、身を引き締めてまいりま す。

O 氏

守破離とはいっても、私のような人間はたぶん死ぬまで「守」で行くしかないと思っていますし、それでいいと思っています。若者には「元気に指導する」ことと、「形無しであってもいい」ことを混同してほしくないと思います。たぶん、その混同が勘違いを生むのだと思い ました。温故知新ですよね。何もないところに新しさだ けを求めても、教育とは言えないと思います。

P 氏

三年目の私は、今ちょうど基礎基本を学び、型を学んでいる最中です。Y 先生のような方が側にいてくださり、ご指導いただけることは、駆け出しのひよっこの私はとても恵まれていると思います。

Q 氏

「自戒を含めて」のところは改めて人間的魅力、温かさの大切さを実感しました。子供と向き合うとき、人と向き合うとき、このことを心に刻んで参ります。

基礎基本を学ぶことは、その本質を理解して身に付けることに繋がることだと思いますが、まだまだ足らない自分を感じる日々です。でも、「いつかは…」と思い、頑張ります。

R 氏

私が道徳授業の基礎基本を学び始めてから子供たちの表情が変わりました。道徳教育を「私のライフワークにしたい！」と思ったきっかけはそこにありました。

「道徳指導の基礎基本は何のためにあるのか？」それを考え始めた時に、道徳を学ぶ楽しさを子供たちと共有できるスタートラインに立てたように思えます。基礎基本を踏まえて授業を行えば、自然と道徳授業が成り立ちます。虚しい授業にならないために基礎基本は知らなくてはいけないと思いました。それが一番の近道だとも思いました。

これから道徳授業が広く浸透していくためには、道徳の授業で各教師が確かな手応えを本当に感じることが大切だと思います。「やりたいようにやれ」「何でもありだ」で取り組んでいた頃の私の授業からは何の手応えも感じられず、虚しさだけしか残りませんでした。だって、道徳の授業には道徳の授業の特質というものがあるのですもの。特質にかなわない授業をいくら力を入れてやっても道徳にはなりません。ですから、「道徳科の時間は何を学ぶ時間か」という根本的な基礎基本をしっかり広めていくことで、道徳への関心や意欲は高まると思います。実際、我が校がそうでしたから。

国語のディベートのような授業、学活のような問題行動の解決の授業がはびこる道徳科はいずれ廃れると思います。道徳が教科化された今こそ、道徳授業の特質を確かめる貴重な機会ととらえ、「道徳科では何を学ぶのか」を常に確かめながら進んでいきたいと思います。

講師の先生方は講師の先生方のアプローチで、私は私の授業実践を通して、基礎基本がいかに欠かせないものであるかを伝えていきたいと思います。

S 氏

本校に今年度初任者が入りました。パワフルで元気のある女性です。

どんな指導にもめげずにくらいついているのは良いのですが、良く考えずに同じ失敗を繰り返し、授業でも狙いを押さえた指導に乏しく、指導教官から日々指導をもらっている状況です。

道徳に興味関心が高く、１学期の道徳授業地区公開講座での授業づくりでは自ら先輩に指導を求め、意欲的に資料提示に工夫を凝らし頑張りました。初任者研修夏季宿泊研修には公開講座で行った授業の指導案を改善して持って行ったようです。しかし、ねらいを明確に意識し、指導観をもった授業にはまだまだ遠く届きません。それはあたり前のことですが、それ以上に、教師のパフォーマンスを前面に出す傾向があることを懸念しております。

他にも、そのような傾向をもつ若手教員がおり、教育指導の意識が伴わずに、ＩＣＴを使ったパフォーマンスだけで満足してしまっているという状態です。

そのような教員に共通した傾向として、学習指導要領解説や教師用指導書等の活字を読んでいない、読まないことなどのことが挙げられます。先生の「道徳科 学習指導案作成入門」もあげたのですが、読まない!!! 自分流があっても良いのですが、それのみでは基本を押さえていないと独りよがりの指導に陥ります。先生がよくおっしゃる「守破離」の大切さを改めて感じるこの頃です。

道徳に限らず、他の分野でも同じことが言えると思います。運動会指導でも、同じ係で組んだ初任者に「やりたいようにやってよい」と言ってしまう中堅教員がいましたが、それは丸投げをしていることにつながりかねません。基本を身に着けた上での型破りなら良いのですが、形なしにならないように指導を続けています。

T 氏

近年道徳科の授業に興味・関心を抱く教員は着実に増えてきています。そうした傾向を好ましく思う一方、ねらいとする道徳的価値の理解が浅いのではないか、教材のよさを本当に分かっているか、子供とのやりとりや対話の深まりを大事にしているかなど、授業者に今一度授業を振り返ってもらうことが多くなったのを感じています。

教育の動向や道徳教育に関する見方・考え方が様々に話題になる中で、何か上っ面なところで話が回っているような気がしています。大学教育は、教員養成は一体何をしているのかと不安を感じています。

それはともかく、目の前にいる教員にだけは真剣に子供と向き合い、格闘してほしいと私も汗を流しています。教員自身が真摯な姿勢で授業に臨み、子供に向き合う中で、ほんものの授業のよさが現れると思います。私には難しいことはよく分かりませんが、今の道 徳教育上の諸問題は道徳科だけで解決できるものではないでしょうが、道徳科の授業でしっかりと子供に考えさせることをしなければ、日本の将来は危ういと思 います。

道徳の教科化、評価ということだけに教員はあたふたとしています。それをなだめなだめしながら、授業の 骨格をしっかりと作れるように、子供と向き合えるよう に、私のできることを精一杯取り組みたいと考えます。

U 氏

私は、学部・大学院で国語科教育を研究してまいり ました。ところが、現場に出て驚きました。活用型学力を育てる授業展開はまだまだ学校現場では定着していないと感じたからです。

２年前に校内研究で授業をやった際、活用型学力を育てる授業展開を意識した国語授業を行ったのですが、その時の講師からもボロカス（不適切な表現で申し訳ありません）に言われ、校内からも冷めた目で見られました。「もう二度と校内研で授業なんかするもんか」と思いました。（今回やるのですが。笑）

それから１年が経ち、「アクティブラーニング」が叫ば れるようになり、学術雑誌を見ても、実践誌を見ても、 自分が目指していた国語授業への転換が図られたものが散見されるようになってきました。

私が常々思っていることは、「若者は先輩（ベテラ ン）の言うことには必ず従う」ということは、この教育界ではあってはならないのではないかということです。もちろん、私たち若者は先輩から学ぶべき点が多くあります。でも、「講師の先生が言っているから」とただ盲従するのではなく、自分たちで研鑽をすることが必要だと感じています。

先生が述べられている「守破離」の考えには私も賛成です。基礎・基本の習得から始めることは、何事においても大切なことであります。しかし、その著名な人の論説にも大きくうなずく点が私にはありました。まだまだ、閉鎖的な世界で若手の芽が摘まれている…という現状があるのではないかと実感しています。

文責：後藤 忠